



113号  
2006/5/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>  
Eメール:[wanli@m2.ocv.ne.jp](mailto:wanli@m2.ocv.ne.jp)  
ホームページのアドレスが上記に変更になりました。



陝北の人々1・少女 (中国陝西省園川県2005年)

周路 撮影

‘わんりい’113号の主な目次

北京雑感その [4]「北京の交通事情-2」	2
媛媛来信 [24]「洪洞県の槐樹」	3
松本杏花さんの俳句「拈花微笑」より	3
黄土高原来信第二部「陝北女娃娃」6〈紅梅〉	4
7〈巧峰〉	5
(原文) 6〈紅梅〉 7〈巧峰〉	6
中国を読む [31]【歌舞伎町の中国女】	7
私の調べた四字熟語 [2]・乾坤一擲	7
「雲南省うどん(米線)の旅-3」	8
四姑娘山麓・フラワーウォッチング-1	10
アフリカとの出会い9「私のアフリカンファミリー」	12
【活動報告】「北朝鮮の夏休み」	14
渡邊義孝氏講演会「旅と人々と暮らしと」	15
あさおサークル祭り案内	15
‘わんりい’掲示板	16

♪♪中国人歌手・趙鳳英さんと一緒に歌おう!♪♪

「中国語で歌おう!会」

まちだ中央公民館で新規発足 会員募集中!

会場:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分  
町田東急裏109ファッションビル7F

講座日:原則として、毎月第2金曜日、又は第3金曜日

時間:19:00~20:30 会費:1,500円(一回ごと)

【5月の練習日】5月12日(金)19:00~20:30

練習曲:「冬のソナタ」のテーマソング

韓国ドラマ「冬のソナタ(最初から今まで~)」は中国でも大ヒット。テーマソングは「cong kāishǐ dào xiànzài从开始到现在」という中国名で多くの歌手が歌っています。きちんと歌えるようになるまで2回か3回に分けて指導いただきます。メロデーは繰り返しますので、ご都合で1回の参加でも楽しめます。

指導:zhào fēng yīng趙鳳英(元中国四川省重慶歌舞団歌手、四川音楽学院講師)

\*体験参加(1200円)歓迎 \*録音機をお持ち下さい。

「歩行者優先」に慣れた日本人が北京の街を歩く時は、前回お話したように、左に交差点を見て横断歩道を渡る時、特に左後方から右折して来る車に気をつけなければなりません。横断歩道の信号が青と言うことは、当然直進信号も青で、右折車は直進車と同じようなスピードで曲がって来ます。横断歩道に人がいても構わずに突き進んで来て、邪魔だと思つてクラクションを鳴らしますが、スピードは落としません。歩行者優先に慣れた我々は、車がスピードダウンしてくれるものと思つて渡りますが、先方はその気がないので、鼻先を猛スピードで走り去るか、ハンドルを切つて、後ろに回り込んで駆け抜けて行きます。事故寸前のヒヤヒヤドキドキの場面を何度も目撃し、たまには自身でも経験しました。北京は、歩行者優先ではなく「車優先」のようです。

このことを肝に銘じていないと危ない思いをすると、もう一箇所、ガソリンスタンドや駐車場への出入りが歩道を横切っている所です。歩道を歩いていて、このような場所にさしかかった時は、立ち止まって車を先にやった方が無難です。道路は車が走っているので、どうせすぐには出られないから、スピードを緩めて歩行者を先に行かせてくれるだろうと考えるのは、大きな間違いです。車はスピードを緩めず歩道を横切り、車道に進入出来ない時は、歩道を跨いで車の途切れるのを待ちます。歩行者は、車の後ろを回り込んで進まないといけません。日本の運転者のように、歩道で停まってしまったら歩行者に迷惑だから歩道の手前で歩行者をやり過ごし、車道に進入出来るようになるまで待とうとは考えないようです。車の持ち主が歩行者に対して優越感を持っている、などと意地悪な見方は控えますが、結果として、車の優位性を主張しています。

歩行者にとっての試練はもう一つ、横断歩道の青信号の時間が短いことです。青信号の時間は、交通量や道幅を考慮して決定するのですが、時間内に道路を横断し終えるのが難しいところは何箇所もあります。私の歩く速度は早い方ですが、信号が変わつてすぐ歩き始めても、反対側の歩道に着いた時にはもう赤になっていることが何度もありました。これでは歩くのが遅い方は渡りきれません。真ん中に安全地帯があるところでは、そこで待てば良いのですが、大部分は何もありません。おまけに自動車は歩行者がいてもスピードを緩める習慣が無いようで、渡りきれない時は、随分危ない目に会います。この状態は、お年寄りや体の不自由な方

にはとても不便です。交差点の信号は、交通弱者も安心して利用できるように、歩行者専用信号で十分な時間をとって欲しいと思います。

何だか、北京市の交通状況に対するクレーム集のようになってしまいましたが、最後に是非お話ししておきたいのが、バス停のことです。ご存知の通り、北京のバス路線は非常に発達していますが、そのせいもあって、同じ名前のバス停でも路線によって止まる場所が違います。直線上で200～300メートルずれているのは仕方がないとして、交差点を曲がって500メートルも行ったところに同じ名前の停留所があったりすると混乱してしまいます。具体的な例を挙げると、「人民大学」というバス停は、最低5箇所あります。三環状線上中央部に急行の止まる停留所が一つ、中関村南大街との交差点の西側と東側に一つずつ、中関村大街上三環状線の北側に二つ、合計五箇所あります。南側にもあるかも知れませんが、私は確認していないので、「最低5箇所」と言っておきます。

北京の人にある場所への行き方を伺うと、「○路の××で降りて…」と教えてくださいます。私は一度、××停留所には◎路バスも行くことを見つけて、生意気にも××へ行ければ良いと考え、◎路に乗ってしまい、××で降りても話に聞いたような道がなく、1時間近くもさ迷い歩いてやっと目的地にたどり着いたという経験をしました。それ以後は、必ず教えられた路線を利用することにしています。路線が非常に多いので、全部の路線を一つの停留所に纏めるのは難しいでしょうが、停車場所が違う時は、同じ停留所名を使わず、例えば「人民大学東」とか「人民大学南」とかにして欲しいと思います。こんな希望をしても一朝一夕には改善されないでしょうが、2008年のオリンピックまでには何とか、少しはマシになるだろうというのが、北京の知人たちの希望的観測です。

でも私は、北京でバスを利用する時の強い味方を見付けました。それは、バス停毎に停車する路線を記載した地図です。同じ名前のバス停があっても、違った位置が地図上に記入されて、それぞれのバス停に、そこに止まる路線が記載されているのです。「△△で乗り換え」と言う時に、何番路に乗って△△迄行けば、降りた所に次に乗るバスが来るのか、或はどこまで歩けば目的地へ直行するバスに乗れるのかが分かります。この地図のお陰で、私の路線バスによる北京散歩が随分楽になりました。



山西省洪洞県の北西へ2キロ離れた所に「大槐\*樹公園」があります。

その公園は、美しい風景や、豪壮な建物があるというわけではなく、目立つのはたった一本の老槐樹の巨木があるだけです。しかし、春夏秋冬を問わず観光客が絶え間なく訪れ、この長い歳月を経た老槐樹の巨木を仰ぎ見ては木の下を巡ります。

元の末頃から明初期にかけて、戦乱、自然災害、飢饉などが続き、河北省、河南省、山東省、安徽省など多くの地方では、人口の数が著しく減少しました。しかし、山西省、特に省の南の洪洞県のあたりは、天候は順調で、経済も繁栄し、各地から難民たちもやって来ましたので、人口過密地域になっていました。

新しく政権を得た明政府は、政治の安定と経済の発展のため、洪武初年(1368年)から永楽15年までの50余年の間に、洪洞県から8回に亘って、大規模的な移民を行いました。移民される人々が集められたのは、この太くて立派な槐樹の下なので、この槐樹の巨木は懐かしい故郷のイメージになりました。

歴史の記載によりますと、明初期の洪洞県からの移民は、主に中原地域でしたが、その後、四川省や、寧夏、新疆、東北、貴州、もっと遠い辺鄙なところにも送られました。

言い伝えでは、移民の途中で人々が逃亡するのを防止するため、役人は、刀で人々の足の小指の爪を切り、その証としたそうで、そのため今でも、漢民族の人々は10人の内、5、6人は足の小指の爪が二つ分かれています。



るのだそうです(医学上では「小趾甲複形」と言います)。

また、長距離を移動するあいだ中、移民たちは腕を後ろ手に縛られました。最初は麻痺しましたが、終にはその姿に慣れてしまいました。それで移民たちの子孫が今でもよく後ろ手を組んで歩くのだとも言われています。また、手を縛られた移民たちが排泄をしたい時は、役人に「手を解いてください」と言いました。今でも俗語に「解手」という言葉があり、よく聞きます。(辞書にも載っています)。

悠々六百年が過ぎました。実は遠い昔の槐樹の巨木はもうありません。今ある老槐樹は、その昔の槐樹の巨木の根から出て来た三代目だそうです。そして移民たちの後嗣は、中国のいたるところ、乃至海外でも生活して居ます。「わが祖先は何処から来たか、山西洪洞大槐樹。。。」というような民謡が何処へ行っても伝わっている理由です。

槐：エンジュ

niān huā wēixiào  
松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

囀や思わず求む菩薩像

niǎo er míng jiū jiū  
鸟儿鸣啾啾

bùyóuzìzhǔ yù gòu qiú  
不由自主欲购求

púsà xiàng cí hòu  
菩萨像慈厚

季语为鸟鸣，春。

小鸟在啼鸣，不知是歌唱菩萨，还是在东瀛的客人面前介绍菩萨像。总之，春天的到来，慈润了鸟儿的歌喉，构成了作者想购买菩萨像的欲望。这里毕竟是西域呀，这尊菩萨像多么逼真、多么灵气、不然，小鸟怎么能在其旁放声高歌呢？

かたかごを訪ひ万葉の歌に逢ふ

zhū yá huā duǒ duǒ  
猪牙花朵朵

yòu wǒ xúnfǎng dàn zǐ sè  
诱我寻访淡紫色

shì féng wàn yè gē  
适逢万叶歌

季语：猪牙花，春。

该花为多年生草本植物，叶对生于下部，椭圆形，有紫斑。春季向下开一朵淡紫色的花。

本想观向赏猪牙花，可当看到神秘的淡紫色，作者又联想起《万叶集》收录了近五千首和歌，其中咏叹紫色花朵的不在少数。



紅梅のことを知ったのは1997年の正月のことでした。安塞県文化館の知り合いに案内されて、安塞の町に近い馬家溝の陳という家庭を訪問しました。戸主の陳丕亮さんはこの地方の人なら誰でも知っている有名な腰鼓の名手であり、夫人の侯雪招さんも又、剪紙が得意で、招かれてヨーロッパへも行ったこともあるほどです。二人には年が近い5人の子どもがあり、紅梅はその四人目で、当時、小学校三年生でした。紅梅は腰に腰鼓を結んでましたが、大人たちが感情漲らせて力強く腰鼓を演じている際も、遠く離れたところで決まり悪そうにこちらのほうを見ていましたので私の注意をひきました。

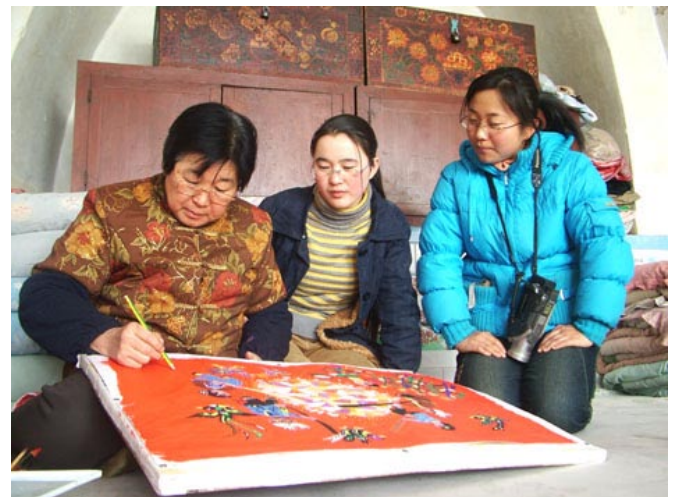
このおとなしく可愛らしい女の子は、しかし、カメラのレンズを恐れず、出来上がった写真には天真爛漫な無邪気さが溢れていました。この後、私は毎年正月には、まるで親戚を訪ねるように、ここで何日かを過ごすようになりました。来る度に、紅梅は少しずつ変わってきました。翌年の正月には、既に父親と一緒に、すっかり自分のものにした、楽しさいっぱいの「歓迎の腰鼓」を踊ってくれ、居合わせていた中央テレビ局の記者は、これ幸いとばかりにビデオを紅梅に焦点を合わせ続けました。

三年目の正月、私は前もって電話でスケジュールを伝えておきましたので、家族は皆、早々と家で待っていてくれましたが、紅梅は待ちかねていたように、習ったばかりの新しい腰鼓シリーズを私と友人に披露してくれました。紅梅の背丈も伸び、おしゃべりも上手になり、顔立ちも以前にも増して可愛らしくなっていました。腰鼓は完全にマスターして、学校の腰鼓団のメンバーに加わっているとのことでした。加えて剪紙の練習も始めたとのことで、紅梅は自分の後ろの窓格子に貼られた剪紙を指差し、ひとつひとつ丁寧にあれは自分が剪ったもの、あれはお母さんが剪ったものと教えてくれました。

段々に紅梅の剪紙も素晴らしいものになってきて、紅梅は父親の腰鼓の芸能と母親の剪紙芸術を受け継いだ、何でも出来る小芸術家だと皆が誉めそやしてい



陕北女娃を見る紅梅 2004年夏



お母さん(左)の制作の様子を見る紅梅(中) 2006年2月

ます。彼らの家は腰鼓と剪紙を生業として生活しており、それで、毎年正月ともなると、遠方からの客で溢れ、時には紅毛碧眼の海外からの客が噂を聞いて教えを求めてやってくることもしばしばです。陳氏は、疲れは縁がないとばかりにいつでも客人のために一連の歓迎腰鼓を踊り、侯夫人は皆の見ている前で剪紙を剪って見せ、紅梅も傍らで腰鼓を踊ったり、剪紙を剪ったりで、忙しいのも又楽しからずやといった風です。

小さい紅梅は既に有名人です。というのは、中央テレビ局のシリーズ番組《同在藍天下》(青い空の下の仲間たち)、陝西テレビ局のシリーズ番組《西部娃娃》(中国西部地方の子供たち)は専ら紅梅を主に撮影し放映しており、他にもドキュメンタリーニュースの報道では10回以上も取り上げられているのです。今年の正月、春節を楽しく過ごす‘西部娃娃’たちのニュースを中央テレビ局が報映するなら、その中にきっと紅梅の姿があるでしょう。





姓名：巧峰 出生日期：1988年10月19日  
 就读学校：小学六年级（-）班  
 家庭成员：爸爸、妈妈、姐姐、弟弟  
 爱好：音乐、数学（大姐、二姐、三姐）  
 长大想干什么：当钢琴家、画家

巧峰の家は南塬村の入り口にあるので、村を訪れるときはいつも此处で休むことにしています。足を休めたり、水を飲んだり、ついでに持参した写真の人物が誰かを巧峰に教えてもらい、一緒にそれぞれの家に写真を届けに回ります。いつも全部済むまで同行してくれるので私は感動し、巧峰も《陕北女娃》に加えることを決めました。

‘大きくなったら何になりたいか’のアンケート(\*)に、‘警官に成りたい’などと書くので驚きました。どこからこんな希望を思いついたのでしょうか？多分、テレビでみた警官物の番組のせいでしょう。しかし、彼女は五人のきょうだいなので家には余裕がありません。この願いは夢で終わってしまうでしょう。

その後再び南塬村を訪ねて学校を止めてしまったことを知りました。どうしてかと訊ねますと家庭が苦しいからとのこと。確かにそれが一番の理由でしょうが、村の学校の教育水準も低く、生徒達の成績が伸びないということもありますし、何よりも女の子は学校に行く必要はないと思われているのが一番の理由と思います。たまたま見かけた、巧峰より2、3歳年上のお姉さんは大きなお腹を抱えていましたが、巧峰が同じ道を辿るのもそんなに遠いことではないでしょう。

2004年7月上旬に、私が又南塬村を訪れますと、村の入り口のところで、色白の、透き通るような肌をした丸顔の少女が私に向かって笑いかけてきました。よくよくみればそれは巧峰で、すっかり変わってしまっているのびっくりしました。この少女が学校に行かなくなって2年余りをずうっと家で家事を手伝っていました。どういう訳か髪の毛は町の子どものように黄色く染めており、体はすっかり女性らしくふくらんで、いつでもお嫁に行けるようです。

以前と同じように、巧峰は私を連れて、丘陵で野良仕事をしている巧琴の家族のところに案内してくれ、村はずれの新しい窑洞では丁度食事をしている亜亜に会いました。そして私達は村の一番高い丘に登って何枚か風景を撮り、巧峰と巧琴と一緒に記念撮影をしたりしました。巧峰の写真を撮るときは花嫁の雰囲気

カメラに収めたいと思いましたが、しかし、カメラのレンズを通してみますと、カメラを横にしても縦にしてもどんなにしても巧峰はやっぱりまだ女の子でした。

陕北にはこのような女の子達が相当数います。何年か小学校に通いますが、殆どは小学校の卒業と共に勉強は止めて、家で家事を手伝い、畑仕事に従事し、しばらくすると仲人が訪れて、相応しい人が見つければ、結婚という生涯の大きな節目を越えます。その後は婚家の先祖のために線香を絶やさず、子どもが育つのを楽しみに、そして、村のおばさんたちに加わって、村の娘達の結納品や結納金の品定めをしたり…、そうです、女性達は殆ど変わることなく、千年を超える黄土高原の地での歳月を、毎年、春夏秋冬を迎えては送り、毎日、東の山に太陽を迎えては西の山に沈む太陽を背にして過ごしてきたのです。

\*その後、巧峰は周路先生の予測したようにお嫁に行ったそうです。



学校に行っていた頃の巧峰



2004年7月の巧峰

认识红梅是1997年的正月期间，在安塞县文化馆同仁的陪同下，来到城关马家沟陈姓家庭。男主人陈丕亮是这儿方圆几十里赫赫有名的腰鼓手，婆姨候雪招亦是远近闻名，出访过欧洲的剪纸高手。他们共育有五个娃娃，一个挨着一个，红梅排行老四，时为小学三年级学生。引起我注意的是当大人们正在激情振奋地表演腰鼓时，她却站在远处，腰间也系着腰鼓，羞涩地朝这边张望。

这是一个很文静，可爱的女娃，也不惧怕镜头，因此拍出来的照片显得天真无邪，亲切动人。这以后我每年正月都要来此往上几日，就象走亲戚似的。每一次来红梅都有变化，第二年正月，她已能和父亲熟练地打起了欢快的迎宾腰鼓，乐得在场的中央电视台记者将摄像机只对准小红梅。

第三年的正月，我已将行程在电话中告诉了老陈，所以他们早早在家等候，红梅更是迫不及待地将她刚练就的一套新的腰鼓套路展现给我和朋友。红梅又长高了，嘴也变甜了，模样更是变靓了，腰鼓自然是老到了，还是学校腰鼓队的呢。而且还开始练习剪窗花了，她指着身后窗格上的窗花，如数家珍地告诉我那个是自己铰的，那个是妈妈的作品。渐渐地红梅的剪纸也有模有样了，大家都夸她是继承了父亲的腰鼓技艺与母亲的剪纸艺术的全能小艺术家。他们家也成了全县闻名的文化专业户，每年正月间，天天总是满堂的远方来客，还有不少海外的大鼻子，蓝眼睛慕名求教。届时老陈总是不知疲倦地为客人们打一套迎宾腰鼓，老候总是现场表演一番剪纸技艺，而红梅则是既打腰鼓，又铰窗花，忙得不亦乐乎。

小小年纪的红梅，已算是个小名人了，中央电视台《同在蓝天下》专栏、陕西电视台《西部娃娃》专栏均以她为主角拍摄播放了专题片，而在其它一些纪实新闻报道中出镜不下十余次，不信，今年的正月间，中央电视台报道西部娃娃欢度春节新闻片中，一定还会有红梅的镜头。

## 巧峰

巧峰家住在南塬村村口，每一次进村，我都在此逗留，歇歇脚，喝喝水，顺便拿着照片让巧峰帮忙指认，然后再由她陪我去各家送照片。有几次几乎是全程陪同，令我有些感动，所以在一次采访完其他娃娃之后，决定将她也列入《陕北女娃》中。她给我的“问卷

中长大想当警察”的愿望让我吃惊，为什么会有这种想法呢？大概是那一段时间电视台热播警匪片的缘故吧。而她家境并不宽裕，又有五个姐弟，我预感这一愿望将会是一个泡影。

以后再来的南塬村，知道巧峰辍学了，问其原因说是家庭困难，这当然是主要因素，但也不能否定乡村学校的教学水平低下，学生成绩普遍滞后有关。而女娃上学无用的思想又占据着主导作用。一次遇见比巧峰大两、三岁的姐姐也挺着个大肚子，让我预感到这样的命运离巧峰也不远了。

2004年7月上旬再次来到南塬村，刚进村口，一个白白净净，圆脸透红的女娃朝我笑，仔细瞧瞧想起是巧峰，真是女大十八变。这娃辍学两年多，一直在家忙着家务，不知为啥头发也像城里孩子一样染成了黄色，身体各部位也发育得很成熟，确实成了闺中待嫁的女子了。和往常一样，又是她带我寻访到在山岭处劳作的巧琴一家，又来到村后新建的窑洞里捉住了在此正吃饭的亚亚，然后我们一行又到村庄最高处的塬上拍了些风景。我为巧峰、巧琴合拍了纪念照。拍巧峰时，想拍出个新嫁娘的感觉，可通过镜头观察，无论横着、竖着再怎么看，这巧峰还是像个娃娃。

这里有相当一批这样的女娃，读几年小学，最多至小学毕业，然后辍学在家帮忙做做家务，干农活，稍后等待媒人上门，寻个合适的人家，完成一生中的婚姻大事。然后为这家人传宗接代，延续香火，待娃娃长大了，又加入到婆姨们的行列中，再去品评各家娃娃的彩礼，聘金……，是啊，总是有这么一大部分固守在这片千百年不变的黄土地里，她们照例每年在这里迎送着春夏秋冬，每日将东山的日头背到西山……。

**周路：**1956年生。

中国安徽省合肥市在住。

木版画家。陕北の黄土高原に魅せられ、度重ねて赴き、2001年～2003年、陕北延川县文化局副局长に就任し現地に住む。木版画制作のかたわら民間美術研究及び撮影等にも勤しむ。著書に《陕北婆姨剪纸》《延川风光》《画家眼中的黄土高原》《陕北纪实》他がある。

周路先生は、合肥市群集芸術館学芸員として、長年民間美術の研究に携わってきましたが、この度、安徽财经大学芸術学部美術学科教授及び学科主任として、今年秋の新学期より迎えられることになりました。





「彼女のカラダは、全世界からタイに集まった何十人、いや何百人ものロリコン野郎が通り過ぎている」。「彼女」とは、12歳のときから、家計を助けるために売春してきた19歳のジェニファアのことだ。一時、ジェニファアの恋人だった著者は、一気に恋心が冷めていく。

「歌舞伎町の中国女」。

なんとも怪しいタイトルに、著者の職業も「歌舞伎町案内人」と変わっている。風俗目的に歌舞伎町へ訪れる外国人観光客を案内する、というのが仕事内容だ。欲望の渦巻く歌舞伎町では中国から出稼ぎに来た女性たちが待っている。

学生時代、歌舞伎町で飲んでいて、終電間際になって道を急ぐと、男友達がよくキャッチの人に呼び止められていた。女性の私がいるのになぜ？ という疑問はさておき「そんな世界もあるのだな」と思いながら酔っ払った体を駅に向かわせた。改めて今「そんな世界」を

読むと、そこで働く中国人女性には家族を養う目的があり、「生きるため」の売春を前にモラルが吹き飛ばされることを知る。そしてなかには、12歳のときから父親からカラダを売ることを強要されるジェニファアがいる。彼女の住む国では、同じ境遇の少女がたくさんいるはずだ。

「わりい」に岩田さんがしばらく連載していた「ネパールスタディツアー」を思い出す。それは、売春で傷ついた女性たちを慰安する旅だった。私は連載を読み、現状に立ち向かう人々の存在に心動かされた。しかし中国人の著者は、男女同権の進む中国から来て、なお男の欲望に従う屈辱的な仕事をしている彼女たちの強さを讃え「この街では、少しばかりの美貌とその強ささえあれば、間違いなく誰だって成功できる。男である私から見て、こんなうらやましいことはない」と書ききっている。彼は歌舞伎町の住人だから。彼の価値観で語ると、売春は成功の一手段になりうる。「歌舞伎町案内人」の言葉と目線で歌舞伎町の女性たちを追い、私は学生時代に感じた「そんな世界もあるのだな」という気持ちになった。しかし「そんな世界」の構図の影に、岩田さんの報告にあった、売春で人生を狂わされた女性たちが確かに潜んでいる。

(真中智子)

## 【わたしが調べた四字熟語 2】

## 乾坤一擲

三澤 統

昨年は郵政解散がありました。郵政改革法案が参議院で否決された結果を受け、改めて民意を聞きたいということで小泉首相が打って出た解散総選挙でした。これは小泉首相にとっては政治生命を賭けた大博打で、まさに乾坤一擲の大勝負だったわけです。結果は国民にとっては幸か不幸か、ご存知の通り自民党の圧勝でした。

乾坤一擲は、中国語で[乾坤一擲]です。

[乾坤一擲]を「中日辞典」(小学館発行)で引いてみますと、「乾坤一擲、のるかそるか、一か八か」と載っています。また「現代国語辞典」(三省堂)では「運を天にまかせて思いきったことをすること」とあります。

調べてみますとこの熟語は、漢楚の戦いに由来する故事成語であることがわかりました。

漢楚の戦いは4年にも及ぶ長い戦いで、竜(劉邦)は疲れ、虎(項羽)も苦しみました。そこで鴻江を境にし

て天下を二分し、西を漢、東を楚とすると取り決めました。そのことで億万の民の生命は保たれるはずだったのです。ところが、劉邦の軍師 張良と陳平は、君王に馬首を回して項羽を追撃することを勧めました。そこで劉邦は、乾坤一擲の勝負を挑んだのです。結果は、劉邦が項羽を倒して、栄光の漢帝国を建てることのできたのです。

後の 韓愈 がこの時のことを詠んだ、「鴻江を過ぐ」という詩があります。

竜疲れ虎困しみて川原を割く

億万の蒼生 性命存す

誰か君王に勧めて馬首を回さしむ

真成に一擲 乾坤 を賭す

乾坤とは天と地のことをいい、一擲は一度にすべてをなげうつことです。つまり劉邦は天下を賭けて、のるかそるかの勝負にでたのです。

▶先に看板が完成

2006年1月1日、「新平」へと出発。ホテルを出たところでたちまち交通渋滞に巻き込まれる。ホテルの前が私設路線バスのたまり場になっており、小型バスが「客待ち駐車」をして、静脈瘤のように道路を塞いでいた。なかなか通れないと思っていたら、ここでも交通警察官が登場して、流れを取り戻した。警察官のやったことは優先順序を示しただけだが。

再び紅河のほとりに出るため、山道を下る。往路は夜で分からなかったが、陽光のもとで見れば、高度感をたっぷり味わえる路である。元陽の街を過ぎて往路に渡った橋を再び通り、今度は右に曲がって河下へ向かう。本当は、左曲がって往路

を戻った方が「新平」に近いのだが、例の崖崩れの道を迂回するため、「箇旧」<sup>ガイジュー</sup>経由の遠回り路をとった。紅河沿いの道は標高が低いため熱帯性の植物が目立った。

「箇旧」は世界第2位の錫の街だそうで(1位はマレーシア)、近代的な広々とした街並みで、活気がある。しかし新しすぎて生活臭に乏しく、行きずりの旅人としてはおもしろくない街だ。ここで昼食になった。あまり欲しくはなかったが、出できたビールをすすめられて飲む。

「箇旧」を後にして「建水」から高速道路となったが、飲んだビールのせいで、尿意を催してきた。じっと我慢し、泰然とした風を装ってパーキングエリアが現れるのを待つ。こういうときの時間経過はのろく、車が高速でも速く感じない。フロントガラス越しに見える景色は、時間が延びてしまい、なかなか近づかない。体をよじってガマン…。

やった! パーキングエリアと、トイレマークの看板がにっこり微笑んでついに現れた。減速して、真新しいできたてのサービスエリアにバスを乗り入れる。目的のトイレはすぐ近くにあり、バスが止まるのももどかしく、急いで駆け込もうとしたのだが、よく見ると、ウソッ! トイレはまだ建設中なのだ。座り込んで作業



中の石工もいる。ウリさんが彼らに訊くと、首を振るばかりだ。不条理な現実には安心して、思わず筋肉がゆるむところであった。先にトイレを完成させてから看板を建ててほしい。

「あんたらのオシッコはどうするんだ!」と作業員らに叫びたかったが中国語ではいえない。無情にもバスは扉を閉めて走行路に戻ってしまい、ガマンが継続した。

しかし容量というものがあり、とうとう限界に近づいてきた。路肩に止めてやっしまおう、ウリさんにそう頼んだ。

▶突然のパンク

バスはいきなりがたがたと振動し、続いて右側の路肩に止まった。様子がおかしいとは思ったが、溢れそうな膀胱の処置が

差し迫った問題なので、側溝を跨いで思いを遂げた。一息ついてバスを振り返ると、運転手も降りてきて、おやびっくり、右前輪がパンクしたのだった。バスが止まった第一理由は、客の私の要望ではなく、タイヤのパンクだった。

これ幸いと、他の人もぞろぞろ降りて、それぞれ膀胱をカラにした。ご婦人方もどさくさに乗じて、畑の中へ消えた。

スペアタイヤに替えて、出発したが、このタイヤで走り続けるのは不安があるということで、高速を降りてから、タイヤ屋に寄りってチューブを新品と変えた。中国では、個人営業の職人さんは、業種を問わず仕事が速い。みるみるうちにタイヤ交換を済ませてしまった。

あれやこれやでまたまた、夕暮れとなってしまう、新平のホテルへは暗くなつてから到着した。夕食は、夜街を歩いて庶民的な店で食べた。

新平の街は、滑走路のように広い道路がグリーンベルト付きで一直線に横たわり、その道路に面して公共の建物が隙間を開けて建つ新しい街だった。泊まったホテルもこの道路に面していた。広い敷地をとり、まだ新しい。私から観るとよけいな装飾や無駄なスペースがあるように思えたホテルであった。3階の一角はまだ職人さんが入って、内装中だった。エレベータばかり使っている人には、こういう点は見えない。

明けて1月2日、朝8時にホテルロビーに集合。前夜食べた食堂に、今度はバスで乗り付けて朝食、米線を食べる。ウリさんによると新平の米線は中国各地を旅したウリさんでさえびっくりする安さで、1人前約2元(35円)だそうだ。

▶花腰の村へ

今日の予定は新平から70kmほど東にある花腰<sup>ダイ</sup>傣族の村「漢沙鎮」へ行く。花腰傣とは雲南省少数民族の傣族の支族である。約6万人ほどの人が北緯25度以南、新平彝族自治州内の海拔500から1300メートルの低海拔地域に住んでいる。タイ国の場合は泰(タイ)の字を用いるが、民族だとニンベンが付いて傣(ダイ)と表記する。

「花腰傣」呼び方の由来は、きらびやかな服飾ゆえに周辺他民



花腰傣族の民家。日干し煉瓦造り、窓は小さい、鉄格子付きだ。





花腰傣族おばさん。右のかぶり物が花腰のもの。左のオバサンの笠との日除け効果の差に注目。

族が彼ら(花腰傣のこと)をそう呼んでるが、彼ら本来の呼び名もあるのだがそれは広まらないで「花腰」が通り名になってしまった。その範囲は、紅河中上流域の傣族全般を指している。この方面の知識はほとんどなく、すべて受け売り情報。「花腰」という名前は今回初めて知ったくらいである。しかし、花腰彝族というのもある、なんだこれは?。ウリさんに問うたところ、支系の場合、1つの民族として申告しても、少数民族と認められない場合もあり、ひどい場合は強制的にほかの民族に入れられてしまった事例があるそうだ。花腰彝族もそれに近いらしい。なお、章家瑞<sup>チンジャールイ</sup>という映画監督作品に雲南三部作と呼ばれる作品があり、第2作目「花腰新娘」(日本題:花嫁大旋風、2004年。ひどい題だね)が、花腰彝族を題材にしている。1作目の「ルオマは17歳(2003年)」は、棚田を題材、3作目の「芳香之旅(2005年)」は文革時代の雲南僻地で生活する運転手を題材、だそうだ。興味があるが、私はどれも観る機会がなかった。

文革時代、雲南省は格好の「農村地帯」だったので、「農村に学ぶ」ため都市部から多くの青年が送り込まれた。文革が終わっても帰れない人もいて、お気の毒である。帰れた人も学業の中断や時代の変化、文革後に生まれた現役後輩との競争があり、希望する進路に進むためには本人の資質、努力だけでなく、強運も必要だった<sup>注)</sup>。私のような短期観光旅行者には、過去の残滓は見えないけれど。

新平の小さい街並をでるとすぐ農村風景に変わる。やがて山



着飾った花腰傣族の小姐。紅河の渡し場で

越えの峠路になり、周りは天然林に変わった。冬でも青葉の照葉樹ばかりなので、見た目は九州の低山に似ているが、生え方はもっと密である。けれども大木は無く、ひよろひよろした樹ばかりだ。しかし、それでも天然林は心むむ。

山道を下り低地になると、再び畑や水田が続く農村風景になった。さらに進んで小さな街「漠沙鎮」に入ってから、右手に曲がり畑の中の狭い路を下った。行く手にパラボラアンテナふうの珍奇な飾りの付いたコンクリートの門が見えてきた。この時は、アンテナを模したような門の意味が分からなかったが、花腰族独特のかぶり物のデザイン化したものと後で分かった。道案内板に「大沐浴村」というのがあったので、大浴場があるのかと思ったが、村の名前でここが目的の村であった。

### ▶ 殺風景な家と華やかな衣装

村のたたずまいは殺風景だ。傣族という、私は高床式の竹の家を思いうかべるが、ここでは違う。家並みは日干し煉瓦を積み上げた暗い家、路は狭く、家々の窓にはガラスの代わりに監獄のような鉄格子がはまっている。チベット族のように窓枠を飾ったりはしない。華やかな民族衣装をまとっている若い女性が生活している家とは思えない。綺麗な衣装と暗い家との落差が大きい。

村の中を抜けた先に広場があり、ここが観光客の駐車場になっていた。この駐車場は自動車教習所も兼ねていて、「教練車」の看板をつけた、トラックに耕耘機の動力をつけたような車(動力ベルトむき出し)が2台、車庫入れ練習中であつた。

すぐ脇のヤシの木立の中に民族舞踊を演じる円形のステージがあり、そこへ行くと着飾ったお嬢さん方10人ぐらいから歓迎を受けた。前もって取り決めてあつたので民族舞踊(有料)が始まり、これを鑑賞。農作業を体現したような、舞踊が何曲か続いた。中国人観光客数人がいつの間にか現れ、ただで便乗鑑賞された。

花腰族のかぶり物は独特な形をしている。竹で編んだ丸い笊状の笠だが、中心にとがった隆起がある。かぶり方は耳鼻科の先生が使う額帯鏡<sup>がくたいきょう</sup>をつける要領でおでこに乗せる。ひもをあごではなく、頭の後ろに回して固定する。笠の面積が大きいので日除けの効果は絶大だ。この笠をみやげ用に1つ20円で買い求めた。

踊り鑑賞の後は、数人の踊り子さんと一緒に紅河ほとりまで散歩。観光用に遊歩道が一応整備されていた。着いた川辺は、渡し場になっていて、鉄板製の渡し舟が渡し守とペアで客待ち中だった。体験のため皆で舟に乗り紅河を渡る。船頭さんは、赤く濁った水に触先を繰り出して上流に向かい、次に舟が水流に押されて下流に流されたと思うまもなく、対岸に着いてしまった。あたりは赤土に埋まった丸石の河原が陽にさらされて広がり、寂しげだった。

村に戻り、昼食を頂く。ここの料理は珍しいものがあり、たとえばタウナギというアナゴの切り身のようなものがでた。名前は知って居る人もいたが、食べるのは初めてといていた。

新平に戻りもう一泊。早起きして、市場を求めて街に出た。いるいる、まだ暗い街角で大勢の農民が野菜などを路上で捌き、店開きの最中だ。自転車などで通う範囲を越えているのか、農民を乗せてきたマイクロバスが数台駐車中。市場で売る農作物をバスを使って運べば、かなりの交通費がかかる。日本でも中国でも農民は苦勞が絶えないと思った。

(終り)

注) 劉岸麗:「雲南、赤い大地」, 河出書房新社, 1999年



四姑娘山麓でのフラワートレッキングのお誘いがあった。それも一昨年、丹巴でお会いしたことのある写真家の大川健三さん（四姑娘山自然保護管理局顧問）の案内で花を訪ねるといふのだから、二つ返事でOKだ。この2年続けて、正月休みに四川省のチベット族自治州に烏里烏沙氏の案内で旅行した。（詳細は「わりい」に佐々木健之氏の旅行記掲載）あの日に見た枯茶色の景色が夏には緑になり、二郎山峠（4450m）もお花畑になるといふのだから見てみたいものだ。

7月28日成田から北京経由で成都へ。出迎えの大川さんを加えて総勢10名の旅が始まった。成都一泊の後、用意のワゴン車に乗り、日隆（3200m）へ向かう。

途中で臥龍のパンダ研究所に寄る。仔パンダを抱いて記念撮影するのだ。昼ごはんの後でパンダたちは寝転がっている。係員が餌を見せて「こっちへおいで」と誘うが見向きもしない。やっと食いしん坊？の1頭が係員にだきかかえられて登場する。仔パンダといっても、2年前の冬は膝に乗せてしっかり収まったのに、2回りも大きくなって、前にもましてずっしり重くかえきれないほどだった。

二郎山峠は霧で四姑娘山は眺められなかった。それでも話の通りのお花畑になっていた。車をおりて花を觀賞する。日本で言えば、ヨツバシオガマ、ハクサンフウロ、ウメバチソウ、ツリガネニンジンなど背丈のある草原を彩る花々が咲き乱れているのだ。薄黄色の大きな苞が目立つ見たこともないトウヒレンの仲間（ボンボリトウヒレン）もあった。（以下、記載の花名は日本でいえば、その花に似ているという意味で使用。帰国後、山と渓谷社刊「ヒマラヤ植物大図鑑」を購入して花の名前を調べたが、確信が持てたものはほとんどない）

日隆までの車窓からは葉がナナカマドにそっくりな白い房咲きの花をつけた樹がたくさん見られた。（中国原産のニワナナカマド？）

高度順化のために日隆でチベット人経営の日月山荘に3泊する。四姑娘山の玄関口の日隆は新しく出来た診



四姑娘山のブルーポピー 沖田辰夫撮影

療所などもあり、思いのほか賑わう観光の町だ。

翌日、小金県と宝興県境の峠である夾金山（4100m）へ車で上る。途中に料金所ゲートがあり、開くまで待つ。畑ではソラマメ、ジャガイモ、エンドウマメの3種類がごちゃまぜに栽培されていて驚く。運転手氏が畑に入ってエンドウマメをもぎとってそのまま食べている。わたしたちも、もらって口に入れる。それが甘くておいしいのだ。一見乱暴な栽培法だが根粒バクテリアを利用した理に適ったものなのだろう。夕食の食材に袋いっぱい詰めて5元とはお安い買い物だった。

山は小雨模様で、峠の小屋で雨具に身を固め、小雨の中を歩き出す。ガードレールをまたいで道無き斜面を下っていく。ウスユキソウ、ムカゴトラノオ、エンゴサク、リンドウ、トリカブトなどの花畑を30分程下り小さな池に着いた。水辺には黄色の筒状の小花を房状に付け、フキのような葉を広げたメタカラコウの仲間？が群生し、霧に霞む水中にはパイカモらしき白花が咲いている。ギョウジャニンニクの大型版の紫色の葱坊主を付けたチベットニンニクも群生していた。これはチベット人も好んで食べるという話だ。

足元の岩に点々と生えている白っぽいムシゴケ科の地衣類を指して「これが雪茶になる」と大川さんが教えてくれた。雪茶とは明の宮廷秘茶で最近ダイエット効果が抜群と人気の高価なお茶だという。「一步一步、息を



吐いては吸ってしっかり呼吸しながら歩くように」と高山病予防の注意を受けて池から峠まで上る。あたりはタカネシオガマ、ミヤマシオガマ、マンネングサ、アズマギク、コゴメグサ、オヤマノエンドウ、ミヤマクワガタなど、あまりの花、花、花に遅々として足が進まなかった。

帰路、道の際に車を停めた。足下の急斜面は高茎草原の花畑になっている。好き勝手に花を見ながら下の道路へ回して貰った車まで歩いて下る。踏まれた道はなくハクサンフウロ、グンナイフウロ、イブキトラノオなどのほか提灯形の花を吊り下げたマンテマなど花々をかきわけるとごとく下りていく。

足場がよい歩きやすい部分はヤクが草を食べるために踏み固めたものらしく、右に左に折り返えすばかりで下の方におりていけないのだ。草に覆われて段差がよく見えず、一段下のヤク道に下りるときは、実に歩きにくかった。

2日目は、双橋溝へ。入り口は狭く両側に岩崖が迫る峡谷なのに、車で進むと広い草原風の景色が展開する。人参果坪で車を降りると民俗衣装を着た小さな女の子が子羊を抱いて母親に伴われ駆けてくる。羊を抱いての記念撮影を商売にしているのだ。2円で羊を抱いての写真をとってもらおう。

遊歩道をひとめぐりすると、ヨツバシオガマ、クルマバナ、ハンカイソウ、レイジンソウ、コウモリソウ、マムシグサ、オドリコソウ、ヤブタバコ、カラマツソウなど見られた。湿地一面に白い玉花を咲かせたイグサの仲間の群生は日本では見たことのないものだった。エーデルワイスの原に放し飼いの黒豚たちが遊んでいるのもこの地ならではの風景かもしれない。

次の下車地は盆景淵だ。逆巻く流れの奥に阿岷山(5033m)という雪山が望める景勝地だが、山は見えなかった。手編みの靴下など商う露店の傍らでは、年配の

女性が手に持った糸紡機を巧みに操っていた。

車道の終点、紅杉林は土産物店に囲まれた広場になっている。左前方の山の岩の斜面には氷河の末端から流れ落ちる幾本もの滝がかかっている。

氷河の末端を目指して草地を抜け、紅杉(カラマツ)林の中を歩いていく。下草には白い花のイチヤクソウやシロバナヘビイチゴ、ヤマハハコ、紫のツルニンジンやクサフジ? や黄色のマメ科の花、オタカラコウなど見られ日本と変わらない。赤いバラはサンショウバラ? 花の形や葉はどう見てもコンロンソウなのに花色は薄桃色の植物がある、やっぱり、ここは日本ではないのだ。

ヤク除けの柵をくぐり、1歩1歩しっかり息を吐きながらゆっくり高度をあげる。岩混じりの道になると、オトギリソウ、ニガナ、キバナシオガマ、エンゴサク、ミヤマシオガマ、イワベンケイ、ハクサンチドリ風の花々が見られた。紫の釣鐘花を上げたサクラソウの仲間は日本では見たことがない。

大石のごろごろした沢状の窪を上りダイオウの林立する場所に着く。さらに上り右にチベットニンニクの群生地が

ある岩原(4150m)に出る。振り返る正面には5500m級の山が聳えているが山頂は雲の中だ。駐車地を見下ろし小休止。途中で今日も小雨模様となり、ここで打ち切って戻る。広場の店で大判のショールを買い求めて明日からのキャンプ地の寒さに備える。

(6月号へ続く)



夾金山のチベットニンニク群生地 福島正子撮影



糸を上手に紡ぎながら商売 田井光枝撮影



不安と緊張を抱えてその村に始めて入った2002年の4月。乾季が終わり雨を誰もが今か今かと心待ちにする季節。農村に暮らす人々にとっては、種まきのタイミングを経験から推し量る季節。気温、雲の動き、日の長さ、動植物たちの動向、これまでの経験、ありとあらゆる動きを読み取っていく。日頃天気予報に頼ってきた生活をしてきた私にとって、ケニア人は一人一人がまるで気象予報士のように「すごい分析力だな」と感心したものだ。

その村とは、首都ナイロビから北上して車で2時間くらいの場所にある都市ニエリというところからさらに車で30分ほどあるキアカンジャという村である。村は地図に名前が載っているわけでもなく、観光客ならその先の国立公園への通過地点として通りすぎてしまうだろう。きっと私も一生その存在を知ることもなく、意識することもなかったような小さな村である。もし、私がこの村で生まれ育った今のケニア人の旦那とナイロビで出会わなければ。

ここを訪ねることになったのは、彼との結婚の挨拶に出掛けることになったからである。いつものように村をぶらっと興味にまかせて訪ねるのは勝手が違う。私の不安は、外国人である私が受け入れられるか、またどのように受け止められるかという心配からきていた。自分の文化を大切にしている民族であることは、理解しているつもりだ。

ナイロビを出発して3時間あまり、目的の村に着いた。キクユ族と呼ばれるケニア最大部族のホームグラウンド。店先からはキクユ語の音楽が流れ、農耕民族らしく畑で作業する人々があちこちで見受けられる。人々の会話は、ナイロビのように英語やスワヒリ語ではなくてキクユ語のみである。

車が着いて家を出迎えてくれたのは、彼のお父さんの祖父

母、両親、弟7人と妹1人の総勢12人。ひとつ屋根の下暮らす家族たちだ。第一印象は、全員が笑顔だったことだ。私の手を引いて、どうぞどうぞと中へと誘ってくれる。居間のソ

ファーに腰を下ろすと、暖かい紅茶が出てきた。挨拶を一人一人と交わす。終始誰もが笑顔だ。言っていることは分からないが、ようこそという気持ちが笑顔から伝わってくる。

家族の紹介が終わると、次は動物の紹介だ。敷地内で飼っている牛、ヤギ、ウサギ、鶏など。名前こそ付いてないが、大切に育てられているのが分かる。そして、家の後ろにある畑にある野菜や果物を紹介してくれる。彼の家は、おじいちゃんの代からのコーヒー農家であり、コーヒーの赤い実をはさみを使って採る方法を教えてくれた。そしてもう一つの30分ほど歩いたところにある畑へ連れて行ってもらう。そこは、豆や野菜などの毎日の家族の食生活を支えるため用のものが育てられてい

た。今日食べる分だけの野菜を収穫する。じゃがいも、にんじん、たまねぎ、ねぎ、トマト、キャベツ、さつまいもなどを一緒に収穫した。

お母さんは終始歌を歌い、妹は小枝などの薪になるものを集めつつ、野菜を採っていく。お父さんは、牛に食べさせるネピアという草を刈っていた。家族全員での作業。1時間も畑にいと私は普段は使わない筋肉のあち

こちが痛くなってきて、ペースが落ちていた。するとお母さんは、「無理しないよ。あなたはあなたができることをやっ



お母さんと



台所で家族と



いる。

そして、夕食の準備をお母さん、妹そして私の3人でとりかかる。お母さんは、一番大きな鍋でご飯を炊く。妹と私は「一体何人分？」と疑いたくなるほどの野菜をひたすら切る。じゃがいもやにんじんの皮だけでも50個以上は剥いただろうか？そして、お父さんと弟たちは裏でウサギをしめていた。ウサギが死ぬ間際に出す低い「キュ」という声が出た。一年に数回しか食べない肉が今夜料理されることで、みんながわくわくしている様子が伝わってくる。しかし、すごい量だ。家族の人数分をはるかに超えて、40～50人分くらいはあるだろうか。

夜も更けて、暗い台所で唯一の明かりである鍋の下で揺らめく火を囲む。鍋が煮えるまで家族で今日あったことなど話す。冗談や歌や、とめどなく会話が弾む。兄弟たちは、学校で習った英語で通訳してくれる。そして、一緒に踊り歌いよく笑った。もうずっと前からこの家族を知っていたような気にさえる。だれもが笑顔で、リラックスしている夜。食事が出来る頃、居間へ移動してみるとランプのあかりの向こうにすごい人数の人が座っているのが見えた。20名くらいはいるだろうか？目を良く凝らしてみても、昼間すれちがって、行くからねと言っていた近所の人達だ。一緒にご飯を食べる。いろいろな会話を交わしながら、新しい人が来ては、帰りの繰り返し。自己紹介だけでも50回以上はしたと思う。

更に夜も更けると、旦那の同級生などの友人達が中心になってくる。ナイロビなどの都市で教育を受けた彼らは英語が上手だ。村の歴史や伝統、今後どうこの村を発展させていきたいかなど、いろいろな話をしてくれる。結局深夜2時ごろまでいろいろな人と話し、眠ったのは3時ごろであった。一日で、彼の家族に、親戚に、近所の人々に、友人たちのほとんどに会い、話をし、しかも前から知っているような感覚にもなったことへの驚きと喜び。朝からの心配や不安はなく、心地よい疲れと眠りについた。木のざわめく音以外は何もしない静かな夜とは対照的だった人々の明るい声と笑顔が心に刻まれた。

朝、鳥の泣き声で目が覚めると、台所から煙が出ていたので入ってみるとお母さんが朝食の準備をしていた。

「よく眠れた？昨日は初めてあなたに会えて家族全員がうれしかった。親戚の人達も村の人全員が同じ気持ちですよ。あなたを導いてくれた神に感謝しているのよ」と言ってくれた。そして熱々の紅茶の入ったコップを渡してくれる。「なんでも話してね。家族なのだから」と。私は、「私が日本人であってキクユの人でないことを気にしますか？」と聞いてみたかったけど、そんなことは考えもしていないようなお母さんの言葉に言葉を飲み込んだ。

その日は、一日かけて私の歓迎会が開かれた。遠方からも



野菜畑

親戚が集まり、100名くらいの人々が集まった。私がどういう人であるかと紹介するというよりは、「ようこそ」という気持ちがひしひしと伝わってくる温かい会であった。3日の滞在中で触れ合った人々はきっと150名くらいだろう。そこでもらった歓迎と笑顔を私はきっと忘れることはないだろうと思う。新しい故郷が出来たと感じるには十分な触れ合いと時間だったと思う。

今、あれから4年あまり。私たちは遠く日本にいる。私のほうがホームシックなくらいに家族や村の人々との時間を思い出す。お父さんは、私が帰ったあと親戚一人一人に私のことを「新しい娘をこれからよろしく。慣れないこともあるだろうから」と挨拶してまわり、お母さんは、小学校のときに使っていた英語の教科書を出してきて英語の勉強をしていると聞いた。次に会うときにはもっと英語を上手に話したいと言っていた言葉通りに。

弟達は、私が植えた野菜に毎日水をやってくれているらしい。私がかわいいといったヤギが大きくなり、最近子供を3匹生んだそうだ。1匹は売らずに私のために家で飼うことにしたと聞いた。妹は、私が教えてあげた日本語の歌を学校の友達に教えてあげる活動をしているそうだ。いつか私がまた来たときにみんなで歌ってくれるそうだ。

だれも、外国人であるとか日本人であるとかで私を見ることはなかったように思う。もちろん違いはあることはお互い理解している。

国際交流、異文化交流、国際理解などいろいろな名前があり、私が学生のころにはなかった学校のカリキュラムやイベントもたくさんある。私たちの団体も小さいながらいろいろなイベントに参加させてもらっている。そこでのさまざまな出会いを通じて感じることは、人と人が繋がるためには「その存在を愛し、愛されること」の繰り返しではないかと思う。その存在とは、結局「私」であって「国籍や人種」ではないのかと、ケニアの家族が教えてくれているような気がする。

## 【活動報告】1 任書剣ドキュメンタリー映画「北朝鮮の夏休み」

上映2006年4月8日(土) 於:まちだ中央公民館

\*この映画は、5月開催のサークル祭でも上映します。

上映日:20日 10:30~11:45 於:麻生市民館・視聴覚室

北朝鮮という国は、ぶ厚いカーテンが引かれているかのように中がちゃんと見えずもどかしい。聞こえてくるのは、将軍様と呼ばれる金正日の絶対的権力、拉致に関わること、飢えと貧困の国と言われながら、強力な軍隊を保有し核の開発をやめようとし、ひと昔前の頑固頑迷で分からず屋の親父のような、かたくなな国の姿勢を崩そうとしません。しかし、世界の非難に耳を貸さず国際連盟を脱退し、第二次世界大戦につっぱした日本も、日本を外側から見れば同じような印象だったのかもしれないとも思います。

当時の日本人の中に、過激で偏った考えをもった人々が当然いたには違いないですが、一方、政治に関わらない庶民は、村をゆく見知らぬ人も暖かく呼び止めて迎え入れ、お茶などの接待を当たり前のようにした私の祖父や、叔母たちのような心優しく、誠実な人たちが沢山いたのです。

中国人留学生である任書剣さんは日本に来て、中国で感じていた北朝鮮と日本で報道される北朝鮮の落差に驚き、日本大学大学院映像芸術博士前期課程終了制作で、この問題の国・北朝鮮の普通の人々の姿をありのまま撮影し、紹介たいと思い立ちました。

当初の予定では、つてを頼って北朝鮮の村に暫く逗留し撮影の予定でしたが叶わず、結局1泊2日の短いツアーに参加しました。1泊2日という全く短い期間でしたが、このドキュメンタリー映画は、厳しいチェックを受けながら出来る限りカメラを動かし、精力的にインタビューを続け、生の朝鮮人に迫ろうという気迫があります。映画を見る私たちは任書剣さんとツアーに参加しているかのように映画に引き込まれ、北朝鮮の国のあり方への批判は別にして、任書剣さんの北朝鮮の人々に対する思いに素直に共鳴できます。

今回、ご覧いただけなかった皆様にも、5月のサークル祭で是非見ていただければと思います。(田井)

### アンケートより:

「北朝鮮の一端を普通の人々の眼で見ることができ、自分が一緒に旅をしているように感じました。今は日本と北朝鮮は政治的に難しいことが多いですが、いつか両国の人々が行き来できるようになるとよいと思いました。そうすればもっとお互いが分かり合えるのにと感じました。」

「映画は大変面白く拝見しました。厳しい条件の下で一般の人々の様子を見せていただけて楽しかったです。それにしても教育とプロパガンダを強く感じて恐ろしいと思いました。」

「人は生まれてくる場所を選べない。誰でも生まれたところで懸命に生きている。それだけなんだと思った。国家や政治や時代が、そうやって生きている人たちに大きく関わってしまう。それを外から見た人が勝手な思いで決め付けてゆくのだと思えば反省することが多かった。」

「(北朝鮮の人々の)笑顔が素晴らしかった。撮り手の人間性やユーモアが、その笑顔を引き出したのだと思った……」

「……感じたのは、国家によるマインドコントロールでした。仲良くなれるといいと思います。」

### ‘わりい’掲載原稿募集

‘わりい’は、会の皆さんで作る会報です。会の活動趣旨に添う原稿やイベント情報を募集しています。明るい楽しい内容でどんどんお寄せ下さい。出来るだけ早く掲載したいと思っておりますが、ページ数の都合で遅れることや若干手をくわえることもありますのでご了承下さい。

\*\*\* 問合せ: ‘わりい’事務局へ \*\*\*



## 【活動報告】2 一級建築士・渡邊義孝氏講演会「旅と、人々と、暮らしと」

2006年4月16日(日) 於：まちだ中央公民館

渡邊義孝氏は、建築士を志して以来、各地の人々が、いきいきと生きている生の空間を見て建築設計の糧にしたいと、スケッチブックと画材を道づれの旅を重ねています。今回の講演では、旧ユーゴスラヴィアから独立のボスニア・ヘルツゴビナとクロアチアの今を、旅で出会った人々とご自分の経験に基づきスライド交えお話をいただきました。

多民族が寄り合い、民族の宗教も異なる複雑な旧ユーゴ連邦は、いろいろな問題をはらみながらも長い間平衡を保っていました。それがどうして泥沼のような紛争に突入してしまったのか。なぜ紛争が拡大していったのか。そして現況はどうか。国際社会の武力の介入と押し付けられた和平。更に、民族を線引きしたことによって民族間の溝は更に深まり、かえって難しい現状になっている。しかし、若者達の間でこのような現状を乗り越えようという動きが見え始めていることなど。

スライドでは、アドリア海の真珠と称されるクロアチアの美しい海辺の町・ドブロブニクが映し出されました。が、その家並みは戦争の痕を修復した屋並みであって、修復された屋根は修復されないくすんだ屋根の色あいと異なり、アドリア海の真っ青な海の色をバックに輝くばかりで、輝く屋根の多いことがかえって紛争の激しさを物語っています。また、今なお無残な銃痕を残したままの壮麗な寺院などの映像もあり痛ましい。

さまざまな人々との出会いから、渡邊氏は言います。平



和維持は‘セルビア人は’、‘クロアチア人は’とか、イスラム教徒は、というように、民族や宗教で一まとめで見るのではなく、個々の人として、また人は人であるとの本質主義的観点でお互いが接する事が大切であると。任書剣さんのドキュメンタリー映画「北朝鮮の夏休み」にも、渡邊氏の姿勢と通じるものがあり、日中両国の若者が同じ視点を持っていることに意を強くしたことでした。そして、近年なんとなくギグシャクしている中国や韓国との関係に、一人ひとり心しなければならぬことでも改めて思ったことでした。

熱心に聴いて貰えて楽しく話せた。機会を見て、又いたしましよと言ってくださった渡邊氏のひと言は嬉しい限りで、本当にまたの機会のあることを願っています。

(田井)

## あさおサークル祭り2006 5月20日(土)・21日(日) 於：麻生市民館(小田急線新百合ヶ丘駅北口3分)

‘わりい’の催し予定(全て参加無料 問合せ:‘わりい’事務局 TEL/FAX:042-734-5100)

### 【視聴覚室】\*\*\*\*\*

#### ▶ 5月20日(土) 10:30～11:30

ドキュメンタリー映画「北朝鮮の夏休み」(2004年)(2005年日本大学大学院湯川制賞)  
中国人留学生のレンズが語る、北朝鮮の人々の日々の暮らしと夢

#### ▶ 5月21日(日) 10:00～12:00 中国川劇ビデオ鑑賞「白蛇伝」\*川劇:中国四川省の地方劇 摩訶(まか)不思議!一瞬に変わる変面の妙技!! 天界を追放された白蛇と、若者の波乱に満ちた愛の行方や如何?

#### ▶ 5月21日(日) 13:30～15:00 「夜来香」を中国語で歌おう! 指導:趙鳳英さん

### 【大会議室】\*\*\*\*\*

#### ▶ 5月20日(土) 14:00～14:30 語りと馬頭琴合奏による「スーホの白い馬」

語り:桑原紀子 演奏:万馬馬頭琴教室メンバー

桑原紀子さんの情感溢れる語りと、馬頭琴演奏で活躍のチ・ブルグドさんが、あさおサークル祭りの為に書き下ろした馬頭琴の合奏でお届けします。

#### 14:40～15:15 万馬馬頭琴アンサンブルによる、迫力の馬頭琴合奏!

日本人馬頭琴演奏者による、万馬馬頭琴アンサンブルは、今年8月、内モンゴルの省都フフホトでの演奏会決定です。

**ご参加をお待ちしています!**

料理講座「夏を呼ぶ南洋の味・インドネシア料理」の味の秘密公開します

暑〜い夏がそこまで来ています! どうしてインドネシアの炒飯・ナシ ゴレンは美味しくて食欲をそそるのでしょうか? インドネシア料理の複雑な味の魅力と秘密を伝授します。

さあ、インドネシア料理を楽しむ、ひと足早い夏の始まりです!!

- 2006年6月4日(日) 11:00 ~ 14:00
- 参加費: 一般 2500円 (会員: 2300円)
- 講師: ROSALITA(ロサリタ)(バンバン ルディアント和光大学助教授夫人)
- 於: 麻生市民館料理室
- 定員: 30名(お申込み下さい)

講習予定メニュー:

- 1) ナシ ゴレン(毎日食べたい、美味しくて複雑な味の炒飯)
- 2) サテイ アヤム(ビールにもぴったり、インドネシア風焼鶏)
- 3) ガドガド(食べ始めたら止められないピーナッツ味の豪華なサラダ)
- 4) 夏の味! インドネシアのデザート 2品



問合せ: 'わんりい'事務局 TEL/FAX: 042-734-5100

中国第10回全国美術展受賞優秀作品による

## 現代中国 ★ 美術展

5年に1度開催の、中国最大規模の公募展「全国美術展」。その受賞作品の中から厳選の、中国画、油彩画、水彩画、漆絵、年画、連環画、漫画など95点を展示

於: 日中友好会館美術館

〒112-0004 文京区後楽1-5-3 TEL: 03-3815-5085

会期: 2006年5月20日(土) ~ 7月2日(日) (月曜日休館)

\*会期中に一部展示替えがあります。

▶前期: 5月20日(土) ~ 6月11日(日) ▶後期: 6月13日(火) ~ 7月02日(日)

- 開館時間: 10:00 ~ 17:00 (入館16:30迄)
- 観覧料: 一般400円 学生200円
- 主催: (財)日中友好会館 / 中国美術家協会

◆「現代中国美術の現状と今後の動向」 5月20日(土) 14:00~15:30  
於: 日中友好会館2F 小ホール 定員50名 申込み不要、入場無料

### 第二回日本中墨会展(入場無料)

中国人画家・満柏さんが指導されている  
水墨画教室連合の展覧会

参加者60名以上、中国水墨画の作品140点以上が展示されます。

於: 相模原市民ギャラリー (JR相模原駅ビル4階)

2006年5月26日(金) ~ 30日(火)

10:00 ~ 17:30

▶初日14:00 ~ 18:00 ▶最終日10:00 ~ 15:00

◆5月26日14:00より水墨画実演

主催: 日本中墨会 会長: 満 柏

事務局 〒229-1123 相模原市上溝1252-15  
電話: 042-757-9518

e-mail: manboinsea@yahoo.co.jp

### 'わんりい'5月定例会

5月21日(日) 15:45 ~ 麻生市民館・視聴覚室  
どなたでもご参加下さい。

'わんりい'のおたより会員継続のお願いとお誘い  
年会費: 1500円 入会金なし  
郵便局振替口座: 0180-5-134011 'わんりい'

'わんりい'は、「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知り、市民レベルでの国際友好活動を目指している市民ボランティアの会です。日本に外国の方々が増え始めた1992年より、主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催したり、2月と8月を除いた年10回、会報 'わんりい' を発行しています。

毎年、4月は新年度のおたより会費納入の月です。新規入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子はおたより又は 'わんりい' HP でご覧ください。

'わんりい'のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、'わんりい'の全ての活動に参加できます。

問合せ: 'わんりい' TEL/FAX: 042-734-5100